秋彼岸法要　九月二十二日（火曜日＝祝日）　午前十一時から

彼岸法要後

津軽三味線　佐藤通弘

【さとうみちひろ／プロフィール】1957年東京都町田市生まれ。東海大学海洋学部在学中に聞いた津軽三味線に衝撃を受け、山田千里師に入門。以後各地のコンクールで優勝し、ロックフェラー財団の奨学金でニューヨーク留学を経て、世界各地で演奏、CDを作成。現在年間80回以上のステージをこなしています。

予告　信を深める旅

本山・妙心寺の文化財護持を目的とした組織に微笑会（みしょうかい）があります。会長は稲盛和夫さんです。松岩寺の檀家さんでも数名の方に入会していただいてます。この会の総会が今年は十月二十二日（木）に、妙心寺の法堂（はっとう）で開かれます。

その前日に「信を深める旅」が企画されます。これが、毎年良い企画です。普段は門を閉じている非公開文化財の鍵をこじ開けてくれます。本山、妙心寺でない催しのようです。

会員（年会費壱万円）以外でも数名ならば参加できます。松岩寺で企画していた本山団体参拝は少しお休みするかわりに、微笑会の「信を深める旅」の情報をお伝えします。

詳しくはお施餓鬼当日、あるいは秋彼岸法要のお知らせと一緒にお届けする予定です。

編集後記

カラーでない、モノクロのちから

○ごめんなさい。右の写真は、無断転載です。「虹二というのは、ペンネームでお檀家です」と書きましたが、もっと詳しく書くと、檀家総代の佐藤憲史さんの御父君の長吉さんのことです。憲史さんはお近くでいつも顔を会わすので、「今度、寺報に使わさせてください」と一言挨拶すれば良かったのですが、事後報告でお許しを。

○その佐藤さんからしばらく前に『佐藤虹二の写真』という写真集を頂戴しました。A4版より少し大きいサイズで100頁ほどの写真集です。全部で40点ほどの写真が掲載されていますが、ひとつを除いて全部白黒の写真です。年譜によれば、昭和三年頃から本格的に写真を撮るようになったといいます。カラーフィルムなんてなかった時代で当然なのかもしれませんが、色があふれる現代に色気のない写真集が新鮮に感じられます。

○色気がないといえば、八月十五日に法話をしてくださる松原信樹師が五月に『山房夜話訳注』（汲古書院刊）という本を出版しました。（よばなし）というくらいだから、なまめかしい話かとおもえば、とんでもない。漢字と難しい経本からの引用ばかりのまったく色気のない本です。なぜなら、中国は元の時代の中峰という禅僧の書籍を訳して注釈を入れた学術書だからです。ちなみに「夜話」は「よばなし」ではなくて「やわ」と読みます。

○そんな学術書が現代の生活にすぐに役立つかというと役にはたちません。でも、カラー写真満載の実用書とは異なり、白黒写真のような凄みがあります。慶應大学の塾長をつとめられた小泉信三氏に次のような言葉があるといいます。

「すぐに役に立つことは、すぐに役に立たなくなる」

このお便りも、役に立つことはナニもかいてないけれど、それでいいのだ、と力づけてくれることばです。

不連続シリーズ「見ーつけた」

不連続シリーズ　見ーつけた！

こんな言葉があります。

「自分が生まれる前に起きたことを知らないでいれば、ずっと子どものままだ」。

古代ローマの政治家・キケロ（BC106～BC43）の言葉だといいます。今どきの若者がテレビのインタビューなんかで言うじゃないですか。

「真珠湾攻撃。なにそれ。生まれてなかったもん」

という、あれですよ。自分の狭小な体験だけでなくて、歴史に学べというのです。そこで、寺の過去帳で昭和二十年の頁を開いてみます。過去帳は故人の亡くなられた年月順に記入していくのが普通ですが、昭和十八年あたりから順序が乱れてきます。それは、昭和二十八年頃まで続きます

熊谷は昭和二十年八月十四日の晩に空襲をうけます。その戦災で亡くなられた方も、一年ほどの期間に散らばって記されています。生死という、人間の根源的な記録でさえ不確かな日々の残像です。

松岩寺も、終戦前夜の空襲でほとんどを焼失します。その時の様子を鮮明に写した写真が一枚あります。「ある」といっても手もとにあるわけではなく、多くの資料や出版物に掲載されている写真です。たとえば、写真集『埼玉の昭和』（埼玉新聞社刊）には見開きで紹介されています。そして、次のような

解説があります。

「佐藤虹二（こうじ）氏の畢生の作品。悲劇の空襲を現在まで語り伝える象徴となった」

この写真の左上部に、松岩寺の焼け残った山門が写っています。今でも時たま、「あの写真の山門はどれですか」と尋ねてこられる人がいます。

確かに象徴的な写真ではあるのですが、カメラマンの畢生（ひっせい＝生涯）の傑作ではありません。なぜならば長くはない生涯（一九一一～一九五五）の中で、ライカを駆使して撮った他の写真のいくつかが現在、東京都写真美術館やヒュースト ン美術館に収蔵されているからです。

虹二氏の創作ノートには、

「シャッターを切る時あの瞬間の手ごたえは忘れられない。猟人が獲物を落とした時にも似た境地があろう」

と、書かれています。虹二というのは、ペンネームでお檀家です。そんな檀家さんがおられたのは誇りです。

さて、もう一度、焼け野原の写真をよく見ます。裸で作業する人がいますから、終戦直後のまだ暑い季節に撮られたのでしょうか。佐藤さんの自宅も全焼したといいますから、難を逃れたカメラで撮影したのでしょう。白黒の写真が語る無言の凄みの中に、戦の終わった安堵感を感じるのです。